

# Radiographic signs predictive of success of hydrostatic reduction of intussusception

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2011-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 俊明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001127">https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001127</a>

順天堂大学 博士 (医学)

氏名 高橋 俊明

論文題目 Radiographic signs predictive of success of hydrostatic reduction of intussusception

(腸重積症に対する高圧注腸整復時の画像所見と整復率に関する検討)

論文内容の要旨

(目的)

腸重積症 (以下, 本症) に対しガストログラフィン高圧注腸整復を施行する際の, 整復率に關与する因子, 特に画像所見について検討した。

(対象・方法)

自施設では本症の高圧注腸整復は, 1998 年以降小児外科医が確立したプロトコールに従っている。本研究では 1998 年から 2008 年に自施設で整復が行われた本症 266 例を対象とした。高圧注腸整復施行中の画像所見として, 重積腸管の先進部の位置および Intussusception bowel ratio (IBR) 値 (注腸所見で重積腸管の長さ (長径) を重積腸管の先進部の結腸径で除したもの) と整復の成否の關係について検討した。

(結果)

266 人中, 成功例は 250 例, 非成功例は 16 例であった。成功例に比し非成功例では平均年齢は有意に低く ( $14.9 + 12.4$  vs.  $8.33 + 3.93$  months:  $p < .05$ ), 発症から整復までの時間が有意に長かった ( $15.0 + 12.5$  hrs vs.  $25.0 + 9.7$  hrs:  $p < .05$ )。画像所見として, 非成功例では重積腸管の先進部が左横行結腸より肛門側に存在する割合が有意に高かった ( $42\%$  vs.  $88\%$ :  $p < .05$ )。また, IBR 値は非成功例で有意に高く ( $1.13 + 0.28$  vs.  $1.68 + 0.47$ :  $p < .05$ ), 16 症例中 12 症例 (75%) で 1.4 以上を示した。

(結語)

高圧注腸整復施行時, 重積腸管の先進部の位置と, IBR 値は整復の成功率に關与し, 重積腸管の先進部が左結腸かそれより肛門側にあり, IBR が 1.4 以上のときは, 外科的な治療を第一選択に考える必要がある。これにより過度な整復による医原性腸管穿孔や長時間の放射線被爆を回避できる可能性が示唆された。